

# 社会人野球クラブチームにおける 学生選手の所属目的についての研究

スポーツクラブマネジメントコース  
5024A312-3 平井 景悟

研究指導教員：武藤 泰明 教授

## 第1章 緒言

### 第1節 背景

日本の企業スポーツの代表的存在の一つである社会人野球は、会社登録チーム（以下、会社チーム）とクラブ登録チーム（以下、クラブチーム）の2つに分類される。戦前の1927年に第1回都市対抗野球の開催を皮切りに、長らく発展を遂げてきたが、1990年代に起きたバブル経済の崩壊により、多くの会社チームが休廃部に陥った。最盛期の1963年の237チームから現在は96チームまで減少しているが、それに代わりクラブチームの加盟が増加し同年76チームが現在は243チームまで増加している。佐々木（2005）はクラブチームが増加した理由の一つとして「社会人選手の受け皿としてクラブチームが企業チームを引き継ぐ形で創設されたからであろう」としている。

また、クラブチームが社会人選手の受け皿だけでなく高校卒業後の硬式野球を継続する場としての役割を果たしているのではないかと考える。その理由は社会人野球では学生の選手登録が可能だからである。富山（2006）は大学野球と会社チームの数の少なさから、高校卒業後に野球を継続できる受け皿そのものが小さいことを指摘しており、クラブチームが野球継続先としての役割を補完するシステムとして機能していくことが必要だと述べている。

### 第2節 社会人野球クラブチームについて

日本野球連盟はクラブチームを「会社や地域、出身校等を背景とした仲間が集まって結成され、その多くは、個人会費や後援会組織、地元自治体等からの支援により運営されている」チームと定義している。会社チームとクラブチームでは練習環境や運営の観点から大きな差があるが2002年に提唱された「21世紀の社会人野球チームモデルケース」をきっかけに様々なクラブチーム在り方が誕生した。提唱の目的は、会社チームの休廃部により減少したチーム数に歯止めをかけ、チームの加盟に規制緩和を行い、チーム数を維持することである。

### 第3節 独立リーグの発足

2005年に四国アイランドリーグ、2006年にBCリーグの2つの独立リーグが発足した。毎年NPB

ドラフト会議にて指名を受けており、2024年12月時点で四国アイランドリーグは86名、BCリーグは75名の選手をNPBへ輩出している。またBCリーグでは毎年クラブチーム出身選手がドラフト指名を受けている。小林（2019）は競技普及の観点から独立リーグはNPBのファーム組織となるのが合理的であると述べている。

### 第4節 先行研究

富山（2006）は、クラブチームに所属する選手は「プロ野球選手になりたいという目標を持って活動していると言うよりも、野球を継続できる環境を求めてクラブチームで活動しているのではないかと考えられる」と述べている。

根本（2012）はクラブチーム設立の目的について独立リーグやNPBを目指す「ステップアップを目標とする選手の育成」が31.5%の回答であったことを報告している。

### 第5節 研究目的

本研究は、クラブチームに所属する学生選手がクラブチームでプレーする事を選択した理由や目的を明確にすることで、今後のクラブチームの運営マネジメント、在り方、役割を明らかにすることを目的とする。

## 第2章 研究方法

### 第1節 調査実施概要

2024年11月30日から2024年12月17日の間に、Google formを活用したWebアンケートを行った。調査対象は、千葉県野球連盟にクラブチーム登録されている8つのクラブチーム全てである。アンケートは2つに分けて実施した。1つはクラブチーム所属の学生選手に対して「高校卒業後の野球継続先として社会人野球クラブチームを選択した理由」について。もう一方はクラブチームの代表者に対して「クラブチーム状況」についてのアンケート調査を行った。

### 第2節 「高校卒業後の野球継続先として社会人野球クラブチームを選択した理由」についての調査

調査対象者は大学1年生～4年生と専門学校生を対象とし該当人数は33名であった。

### 第3節 「クラブチーム状況」についての調査

調査対象者は各クラブチームの代表者（監督、若しくはマネージャー）とし、何れか1名から回答を得ることとした。

## 第3章 調査結果

### 第1節 「高校卒業後の野球継続先としてクラブチームを選択した理由」についての調査結果

#### 第1項 アンケートの回答者、回答結果

対象者が33名に対し25名の回答があった。回答率は75.7%だった。内訳としては大学生が22名、専門学校生が3名であった。

#### 第2項 高校野球での経験について

25名の内、22名が高校野球経験者でそのうち13名がレギュラーであった。中には甲子園ベスト8を経験している選手もいた。

#### 第3項 大学、専門学校の野球部に所属しなかった理由について

「野球以外の大学生活を充実させなかった」の回答が一番多く、学業やプライベートを充実させたい選手が多いことが推測される。

#### 第4項 地理的位置関係について

通学キャンパスと野球部グラウンドが離れており、学業と部活動両立が難しいことから地理的要因で入部を断念した学生が一定数いた。

#### 第5項 クラブチームでプレーする事を選択した理由、チーム選択の理由について

「週末のみの練習・試合の為自分に合っていると思った」の回答が最も多かった。

#### 第6項 現在の満足度について

9割の学生選手がクラブチームに入部した事、活動に満足している結果となった。大学野球部に入部しなかった事、退部した事について、2割の学生が後悔しているとの回答があった。

#### 第7項 学生選手が今後クラブチームに期待すること、改善点について

クラブチームがもっと注目されること、知名度の向上等の内容の回答が多かった。他にも練習環境の改善や活動日の部員の出席率の向上、グラウンドが遠方の為に車のガソリン代の負担が大きいなど、特有の課題がある事がわかった。

#### 第8項 進路について

約8割の学生が一般企業に就職する予定との回答だった。また継続してクラブチームに所属するという回答は約3割にとどまった。

### 第2節 「クラブチーム状況」の調査結果

#### 第1項 アンケート回答者、回答結果

回答者は7チームが監督、1チームがマネージャーであり、回答率は100%だった。

#### 第2項 回答チーム基本的概要

設立年度は2000年代前半が最も多く、設立目的に関しては「地域の活性化」や「硬式野球継続の為の受け皿」の回答があった。

#### 第3項 練習環境について

8チーム中5チームがホームグラウンドを所有しており、その他にも公共施設のグラウンドを借りて活動していることがわかった。

#### 第4項 チームの活動について

1週間の活動日数については週2日の回答が

最も多かった。年間の試合数については年間40試合以上行っているチームが4チームあった。

#### 第5項 チームの運営について

8チーム中、5チームにスポンサー企業や後援会組織がいることがわかった。チームの資金調達方法は部費が最も多く、社会人選手と学生選手で金額に差をつけているチームもあった。

#### 第6項 選手の募集について

募集方法については「メンバーからの紹介」が最も多く、次いでホームページ、SNSという結果だった。学生選手を募集しているかについては7チームが「募集している」回答だった。

#### 第7項 学生選手に行っているサポート等について

学業と両立出来る環境整備や就職活動の支援、部費を安くしている等の金銭的な支援も行われている。また独立リーグ等の上位のレベルで野球をしたい学生選手の支援も行われていた。

#### 第8項 チームの課題や悩み、問題点について

近隣でグラウンドの確保ができないこと、活動の際のメンバーの出席率が悪いことが挙げられていた。また資金に関する課題や悩みを抱えているチームが多いことがわかった。

## 第4章 考察

学生選手にとってクラブチームは硬式野球を継続しつつ、学業やプライベートも充実させる事ができる環境で、バランスよく野球と学生生活を送りたい選手には最適な環境ではないかと考える。また、クラブチームでプレーする目的は様々であり多様な役割を果たしている。

クラブチーム自身も学生選手を受け入れる体制、環境が整っている。学生選手の募集も行っており、週末土日の活動が学生のニーズと合致している点や就職活動がし易い点が満足度の高さに繋がっているのではないかと考える。

また、様々な年齢層で、多様な目的を持った選手がいることがクラブチームの特徴だが、故にチームと個人の方向性を定めることが難しい一面もあることが分かった。その理由としてどのようなチームなのか十分に把握せずに入団してしまったのではないかと推測する。

## 第5章 結論

学生選手にとってクラブチームは、硬式野球を継続する受け皿でありつつ、競技力の向上、試合への出場機会、キャリアアップ、学業やプライベートとの両立等、多様な目的を持った学生自身のニーズに柔軟に対応できる役割や機能を果たしていることが明らかになった。また、学生のうちから社会人とのコミュニケーションを図れる場としての側面もある。

社会人野球といいつつも、クラブチームは学生選手を受け入れる体制や環境が整っており、学生選手自身の満足度も高いことがわかった。